

第1000回オーチャード定期演奏会

6月23日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第1001回サントリー定期シリーズ

6月24日(月) 19:00開演 サントリーホール

第162回東京オペラシティ定期シリーズ

6月26日(水) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

6
/23

6
/24

6
/26

指揮：チョン・ミョンフン

ピアノ：務川慧悟

オンド・マルトノ：原田 節

コンサートマスター：依田真宣

メシアン：トゥランガリーラ交響曲(約80分)

- I. 序奏
- II. 愛の歌1
- III. トゥランガリーラ1
- IV. 愛の歌2
- V. 星々の血の喜び
- VI. 愛の眠りの庭
- VII. トゥランガリーラ2
- VIII. 愛の展開
- IX. トゥランガリーラ3
- X. 終曲

※途中休憩はございません。

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) 独立行政法人日本芸術文化振興会

後援：在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ 協力：Bunkamura (6/23)



- ♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
- ♪ 演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
- ♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
- ♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
- ♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。



今回のオーチャード定期演奏会は東京フィルが「いとう呉服店少年音楽隊」として1911年に発足の後、様々に名称を変えながら第二次世界大戦を乗り越え、1948年4月に「東京フィルハーモニー交響楽団」の名で第1回の定期演奏会を開催してから1000回目を迎える記念すべき公演です。本公演のプログラム扉(左ページ)では、第1回定期演奏会のプログラム冊子のデザインを取り入れました。歴史に想いを馳せ、未来へと続くオーケストラの歴史の1ページを共に体験いただければ幸いです。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者(1984～1989)、パリ・オペラ座バスターニユ音楽監督(1989～1994)、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者(1997～2005)、フランス国立放送フィル音楽監督(2000～2015)。現在は名誉音楽監督、ソウル・フィル音楽監督(2006～2015)、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者(2012～)など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。2022年6月、イタリア共和国功績勲章であるグランドオフィサーの称号を長年にわたるイタリアの文化発展への貢献に対して受勲。2023年3月、イタリア・ミラノのスカラ・フィルハーモニー管弦楽団として初めての名誉指揮者に就任した。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドバイザーに就任、2010年より桂冠名譽指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。



©Yuji Ueno

ピアノ 務川 慧悟

Keigo Mukawa, piano

2021年世界三大コンクールの一つである、エリザベート王妃国際音楽コンクールにて第3位受賞。2019年にはフランスで最も権威のある、ロン＝ティボー＝クレスパン国際コンクールにて第2位受賞。

長い歴史と伝統のある2つの国際コンクールの上位入賞で大きな注目を集め、現在、日本、ヨーロッパを拠点にソロ、室内楽と幅広く演奏活動を行っている。バロックから現代曲までレパートリーは幅広く、各時代、作曲家それぞれの様式美が追究された演奏、多彩な音色には定評がある。また現代ピアノのみならず、古楽器であるフォルテピアノでの奏法の研究にも取り組んでいる。

東京藝術大学を経て、2014年パリ国立高等音楽院に審査員満場一致の首席で合格し渡仏。ピアノ科第3課程を修了、室内楽科第1課程修了。現在は国内外での演奏活動の傍ら、フォルテピアノ科に在籍し研鑽を積んでいる。2022年、NOVA Recordより「ラヴェル:ピアノ作品全集」をリリース。また、自身の編曲によるラヴェル『マメール・ロワ』ピアノソロ版の譜面をMuse Pressより出版している2024年、第33回出光音楽賞受賞。

Official Website <https://keigomukawa.com/>



©Yutaka Hamano

オンド・マルトノ 原田 節

Takashi Harada, ondes Martenot

強烈な自己表現能力に優れたオンド・マルトノとの出会いを期に、慶應義塾大学経済学部を卒業後渡仏、パリ国立高等音楽院(コンセルヴァトワール)オンド・マルトノ科を首席で卒業、オンド・マルトノを独奏楽器として扱う世界でも数少ないソリストとしての演奏活動を開始した。出光音楽賞、横浜文化奨励賞、ミュージック・ペンクラブ賞など受賞も多数。また、20世紀を代表するフランスの作曲家オリヴィエ・メシアン作曲「トゥランガリーラ交響曲」は、オンド・マルトノが主役として活躍する楽曲であり、日本国内はもちろん、ソリストとしてカーネギーホール、ベルリンフィルハーモニーホール、シャンゼリゼ劇場、パリ・オペラ座、ミラノ・スカラ座といった主要な劇場における世界最高峰のオーケストラとの共演は20ヶ国350回を超える。

Instagram: @takashiharadaondesmartenot

楽曲紹介

解説＝平野貴俊

メシアン トゥランガリーラ交響曲

第2次世界大戦後には社会・文化のあらゆる側面がリセットされ、作曲家もまたタブラ・ラサ（白紙）の状態から創作を再開した、とよく言われる。この説明はP. ブーレーズやJ. ケージらいわゆる「前衛」の作曲家を念頭においたものだが、彼らの台頭に先立って、この白紙をひときわ鮮やかに塗りあげた作品がある。それがオリヴィエ・メシアン（1908-1992）の『トゥランガリーラ交響曲』である。

第2次世界大戦中、ゲルリッツ（現ポーランド領）の捕虜収容所で8か月を過ごしたのちフランスに戻り、1941年にパリ音楽院和声クラス教授となったメシアンは、フランスの主導的な中堅作曲家としての地位を築きつつあった。ところが、カトリックの信仰に篤いオルガン奏者でもあったメシアンが当時書いていた、神への愛を独特のリズムと魔法で表現する音楽は、一部の批評家からその珍妙さを批判され、「メシアン事件」とよばれる論争が引き起こされた。

そんなメシアンに国際的に活躍するきっかけを与えたのが『トゥランガリーラ交響曲』だった。指揮者・コントラバス奏者のセルゲイ・クーセヴィツキー（1874-1951）は早くも1936年、『忘れられた捧げもの』（1930）のアメリカ初演を指揮していた（このときメシアンの作品は初めてフランス国外で演奏された）。財団を設立しバルトーク『管弦楽のための協奏曲』（1943／45）なども委嘱していた彼は1945年6月、メシアンに手紙を送り、1000ドル（現在の約270万円に相当）という委嘱料のみを提示して作曲を依頼する。日本が終戦を迎えた直後の8月20日に承諾の返事を送ったメシアンは、委嘱作を約2年5か月かけて作曲、アメリカでの世界初演は完成の約1年後に行われた。

初演時の聴衆、批評家の反応はおおむね冷たく、フランス初演（1950）を聴いたプーランクも酷評を口にした。しかし、小澤征爾が指揮した日本初演（1962）など、メシアン臨席のもとでの演奏が世界各地で相次いだ結果、現在では25を超えるCD録音が存在し、日本でもほぼ毎年演奏される人気作品となった。ローラン・プティ、ジョン・ノイマイヤーの振付によるバレエ化も行われて

いる。1994年には、作曲時のメシアンと同じ年頃のチョン・ミョンフンが指揮し、晩年の作曲者が「決定版」と絶賛したドイツ・グラモフォンの録音(1990)にもとづき、細かな修正を含む改訂版のスコアが刊行された。

メシアンは本作を、歌曲集『ハラウィ』(1945)と合唱曲『5つのルシャン』(1948)に挟まれた「トリスタンとイゾー」3部作の2作目に位置づけたが、愛と死をテーマとするこのサイクルのなかでも本作は、盲目的な喜び、恋人たちの万物を超越する愛に焦点をあてている。メシアンはパリ音楽院で最初に教えた生徒のひとり、ピアニストのイヴォンヌ・ロリオ(1924-2010)とこのころたびたび演奏旅行を行い、自作の2台ピアノ曲『アーメンの幻影』(1943)などを演奏していた。他方で、妻であるヴァイオリニストのクレール・デルボス(1906-1959)は、43年ころ始まった心身の不調をさらに悪化させてゆく。デルボスが世を去った2年後、ロリオはメシアンの2番目の妻となった。

メシアンは、サンスクリット語で「トゥランガ」は経過する時間、「リーラ」は神々による創造と破壊であり、「トゥランガリーラ」は愛の歌、喜び、時間、動き、リズムなどを意味すると言うが、たんに耳に快い響きの語が選ばれた可能性もある。また最初に作曲されたのは序奏、第4、6楽章、終曲であるといい、一部の楽章はメシアンによれば伝統的な形式に拠っているため、10楽章という異例の楽章数をもつ本作にも、交響曲としての性格は確かに残っている。構成としては、「愛の歌」(第2、4、8楽章)と「トゥランガリーラ」(第3、7、9楽章)の系列が、本作の精髓ともいえる序奏、第5、6楽章と終曲を取りまいている。オーケストラに実質上のソロとして加わるのは、ピアノと、1928年にフランスで開発された電子楽器オンド・マルトノ。卓越した技巧の持ち主であるロリオを想定して書かれたピアノ・パートはオーケストラを「ダイヤモンドのように輝かせ」(メシアン)、1930年代からメシアンがたびたび用いたオンド・マルトノは、天と地を媒介するかのような妙なる音色を響かせる。また「ガムラン」(メシアンは1931年のバリ国際植民地博覧会で聴いて感銘を受けた)と彼がよぶグロッケンシュピール、チェレスタ、ヴィブラフォン、ピアノ、金属打楽器からなる楽器グループも活躍する。以下の楽章ごとの解説では、メシアン自身が指摘する形式・技法上の特徴のみ簡潔に記すにとどめた。103人の奏者が展開する、80分超の壮大な音の世界に身を浸したい。

第1楽章 序奏 トロンボーンによる荘重な**彫像の主題**、2本のクラリネットによる**花の主題**。メシアンは花の主題のイメージとして、細い花穂に交互に花が咲くグラジオラスなどを挙げている。

第2楽章 愛の歌1 4つの和音からなる**和音の主題**は本楽章以後、第7、8楽章、終曲で用いられる。

第3楽章 トウランガリーラ1 大太鼓、ウッドブロック、マラカスが3層の「リズムの登場人物」(音価すなわち音の長さの増加、減少、不変化を対照させる、メシアンが考案した技法)を形成する。

第4楽章 愛の歌2 2つのトリオをもつスケルツォ。末尾の星の瞬きを思わせる音響に、メシアンの巧みな管弦楽法が表れている。

第5楽章 星々の血の喜び ソナタ形式。展開部ではリズムの登場人物によって**彫像の主題**が発展される。

第6楽章 愛の眠りの庭 オンドと弦楽器が**愛の主題**を緩やかなテンポで奏する。ピアノはナイチンゲール、クロウタドリなどの歌を奏でる。

第7楽章 トウランガリーラ2 リズムと音価に関する技法が用いられる。不気味な雰囲気、メシアンはエドガー・アラン・ポーの短編小説『落とし穴と振り子』に関連づけている。

第8楽章 愛の展開 **愛の主題**が次々と転調、反復され壮大なクライマックスを築く。

第9楽章 トウランガリーラ3 17の音価(16分音符から16分音符の17倍)がさまざまな楽器に割り当てられ、弦楽器が13に分かれたパートを奏する。

第10楽章 終曲 ファンファーレ的の主題が反復されたのち、オンドとオーケストラが**愛の主題**を高らかに歌いあげ、愛と喜びの狂乱へと至る。

【作曲年代】1946～48年 【初演】1949年12月2日、ボストンにてレナード・バーンスタイン指揮ボストン交響楽団、イヴォンヌ・ロリオ(ピアノ)、ジネット・マルトノ(オンド・マルトノ)の演奏による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット3、ホルン4、ピッコロ・トランペット、トランペット3、ホルネット、トロンボーン3、チューバ、打楽器(タン布林、プロヴァンス太鼓、小太鼓、大太鼓、トライアングル、小シンバル、クラッシュ・シンバル、サスペンデッド・シンバル、チャイニーズ・シンバル、タム・タム、チューブラー・ベル、マラカス、ウッドブロック、テンプル・ブロック3、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン)、チェレスタ、ピアノ、オンド・マルトノ、弦楽5部

彫像の主題

Lourd, presque lent



花の主題

Lent



和音の主題



愛の主題

Très modéré, très tendre



ひらの・たかし／音楽学者。1987年生まれ。12歳のとき『トゥランガリーラ交響曲』を初めて聴いて現代音楽に開眼。原田節氏にオンド・マルトノの手ほどきを受ける。音楽学(博士)。第2次世界大戦後のラジオ・フランスによる音楽活動、20世紀フランス音楽を中心に研究、執筆、翻訳を行う。訳書に『オリヴィエ・メシアン』(ジャン・ボワヴァン著、小鍛治邦隆 日本語版監修／アルテスパブリッシング)がある。東京藝術大学大学院、明治学院大学非常勤講師。